

毛虫

一幾度も折れ曲げるもの

佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。



よほどの昆虫好きでなければ、毛虫が好きという方はあまりいないと思います。アイヌの人々のなかにも毛虫が嫌いな人

は多く、なかには毛虫を見ると半狂乱になる人もいたそうです。アイヌ語では毛虫のことを、アシトマイコンパ (a-我々が sitoma-恐れる i-それを kompa-幾度も折れ曲げる p-もの) ともいいます。「恐れる」のは、毛虫のなかにはマイマイガの幼虫のように触れると痛いなどの害を及ぼすものがいるからです。アイヌ語はひとつの言葉がそれぞれ意味のあるいくつかの部分にわかれます。そして、各部分が、言い表したいものの特徴を表現しつつ、全体としてひとつの意味をなすところが、興味深いところです。古い言葉ほど各部分に分解できる構成になっているようで、ラテン語なども同様に細かく分解できるといわれます。このアイヌ語も、毛虫が折れ曲がりながら動いていることをじっくり観察し、それに対する自分たちの思いも入れて名前を付けたと思われます。現代日本語は、日本列島では最も古い言葉であったはずの縄文語に大陸から来た人々の言葉や文字が加わって変化してしまっているため、語源がよくわからないものが多いといわれます。毛のある毛虫はヌマウシコンパ (numa-毛 us-ある ikompap-毛虫) キャベツにつく青虫のように毛のないものはヌマサキコンパ (numa-毛 sak-ない ikompap-毛虫) と呼ばれます。先に述べたように、毛のあるものは毒があるものも多かったため、アイヌの人々には特に忌み嫌われました。毛虫はモシリシナイサム (mosir-国土が sinnay-別の sam-側) つまり、私たち人間が暮らしている世界とは違うところの者、と表現されることもありました。その異様な姿から、とても同じ世界の生き物とは思えないという気持ちもわかるような気がします。このサムは人間にも使われることがあり、和人を表す丁寧な表現であるシサム (si-

本当の sam-側 (の人)、隣人) にも使われます。和人のアイヌ側からの蔑称シャモは、シサムの短縮形です。和人 (大陸から来た人々) をさ

す隠語として、オヤキサルス (oya-別の kisar-耳を us-つけている i-者) という言葉があります。朝鮮系の人には耳の形が違っていることから、このように呼んでいたようです。最初はロシア人、後には西洋人全般をフレシサム (hure-赤い (毛の) sisam-隣人)、肌の色の黒い人はクンネ (kunne-黒い) シサムと呼んでいました。

毛虫は時間が経つと蝶や蛾になります。蝶はマレウレウ (ma-泳い(で) rew-止まりに rew-止まる)、蛾はアペトゥンペ (ape-火を etun-借りる pe-もの) です。これらも蝶がひらひら飛んでいる状態や、火の明かりによってくる蛾の生態がよく表現されています。ちなみにカラスアゲハは、クンネ (kunne-黒い) マレウレウ、キアゲハはシウニン (siwnin-黄色) マレウレウです。蛾も加害するものばかりではなく、山繭蛾 (天繭) という種類の蛾は美しい緑色の繭をつくるのでアイヌの人々も、繭を茹でてから糸 (天然の絹糸) をとって刺繍糸としてに使っていたそうです。

織物に関係しそうな虫は、見事な巣を織り上げる蜘蛛です。蜘蛛は一般的には虫と思われていますが、正確には昆虫ではなく節足動物に属するそうです。蜘蛛はアイヌ語ではヤオシケツカムイ (ya-網を oske-編む p-もの kamuy-神) と言い、アイヌ社会では、織物などの手仕事は女性の仕事であったため、この蜘蛛の神を大事にすると手仕事が上手になると考えられています。また、アミタンネマツ (ami-その爪が tanne-長い mat-女性) と呼ぶ蜘蛛の一種は、難産の際に祈願することで、長い爪で赤ちゃんを引き出してくれる、難産の守り神でもあります。

.....

*本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏 (1940-2025) 元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般 (精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療 (整体ほか) 等) を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリマン社、2019年)、『平成20~令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~16』(北海道教育委員会、2008~2025年) 等。